

新産地報告

## 岡山県から見つかったヒュウガミズキ (マンサク科)

岡山県自然保護センター 地職 恵

*Corylopsis pauciflora* Siebold et Zucc. (Hamamelidaceae) discovered in Okayama Prefecture

Megumi CHISHIKI, Okayama Prefectural Nature Conservation Center

キーワード：ヒュウガミズキ, 岡山県, 新産地, 生育地.

### はじめに

2016年4月5日, 鏡野町上斎原村地内において, 林道脇の斜面で開花しているトサミズキ属 (*Corylopsis*) 植物を見つけた。長さ1~2cmの短い花序に1~3個の花をつけ, 樹形は細い小枝がよく分枝しており, ヒュウガミズキ *Corylopsis pauciflora* Siebold et Zucc. と同定した (図1, 2)。その日は大雑把な生育範囲を確認し, 5月12日に改めて現地へ赴き, 生育地の状態や群落の範囲など, 詳細な調査を行った。

ヒュウガミズキはマンサク科トサミズキ属の落葉低木で, 石川県・福井県・岐阜県・京都府・兵庫県の日本海側の岩地に生え, 和名とは異なり九州には生育しないとされていた (山崎, 1989)。その後2016年3月に発行された『改訂新版 日本の野生植物2』 (門田, 2016) では, 「本州 (岐阜県, 石川県~兵庫県の日本海地域)・四国 (高知県)・九州 (宮崎県), 台湾に分布する」とされ, 新たに四国と九州の産地が追加されている。環境省編レッドデータブック2014 (環境省編, 2015) にはランクされていないが, 石川県では絶滅危惧Ⅱ類 (石川県編, 2010), 福井県では要注目 (福井県編, 2016), 京都府では要注目種 (京都府, 2015) とされている。



図1. 開花中のヒュウガミズキ (2016年4月5日).



図2. 新緑のヒュウガミズキ (2016年5月12日).

連絡先：fvbs5493@mb.infoweb.ne.jp

岡山県内からの採集報告はなく、また岡山県野生生物目録(2009)にも記載がないため、ここに岡山県新産として報告する。

## 観察結果

### 1. 生育状況

岡山県で見出されたヒュウガミズキは、標高約790m前後に生育し、地質は花崗岩である。生育地周辺は、ほぼスギやヒノキの人工林になっているが、岩地や急斜面は二次林の天然林が残されている。ヒュウガミズキは、生育する斜面が林道に分断されたような形で、林道ぞい(図3, 4)、斜面のスギ人工林内(図5)、渓谷を含む二次林内(図6)、切り立った岩場(図7)など広範囲に生育する。確認できた生育範囲は、林道沿いの約300mの区間、道路より上部20mと下部10mほ

どであり、V字谷になる斜面側壁には、密度の濃い群生地があった。下端は谷底まで確認できたものの、谷の上端は急峻で足場も悪いため、確認できていない。アカマツが生育する尾根やヒノキ人工林内では生育しない。足場は急峻で滑りやすく



図5. スギ人工林内の群落 (2016年5月12日).



図3. 林道脇の群落 (2016年4月5日).



図6. 二次林の群落 (2016年5月12日).



図4. 林道脇の群落 (2016年5月12日).



図7. 切り立った岩場の群落 (2016年5月12日).

不安定で、立ち木につかまりながら移動したが、垂直に近い岩壁に張り付く群落には近寄れなかった。

生育地の二次林斜面には、高木層にイヌブナ、クリ、ウワミズザクラ、アオハダ、ミズメ、ハリギリ、ナナカマドなどが見られ、低木層にはヒュウガミズキの他、ユキグニミツバツツジ、ムラサキシキブ、ネジキ、クロモジ、ホツツジなどが生育する。溪谷沿いでは、高木層にサワグルミ、ミズキ、ハクウンボクなどが、低木層にはツリバナ、コマユミ、ハイヌガヤ、ツノハシバミなどが生育する。

急峻な地形が影響するのか、背丈が低いものは立ち上がるが、伸びるに従い斜めもしくは斜面に沿うように伸び、倒れて地面に接した部分から根を出しているものもあった(図8)。樹高は30cm程度のものから3mほどまで多様であり、芽生えて数年程度のものもあったことから、種子による更新が行われているようであった。

多くが数本からそれ以上の株立ちになり、枝は細かく分岐して広がる。スギ人工林内に生育するものでは、主幹が地際付近で切断された痕跡が残るものもあった(図9)。

発見時の4月5日には5分咲きであったが、5月12日には若い果実になっていた(図10)。

## 2. 兵庫県の自生地

岡山県内の生育地と、既知の生育地の環境を比べてみたいと思い、隣の兵庫県の自生地を訪ねて

みることにした。兵庫県植物誌研究会代表の小林禱樹氏に、ヒュウガミズキの生育地についてお尋ねしたところ、兵庫県では10か所ほどから標本が採られている(福岡ほか編, 2002)こと、そのうち小林氏が確認しておられる、行きやすい2か所の自生地を教えていただき、6月14日に現地へ赴いた。

### 調査地1. 朝来市生野町

ゆるく流れる溪谷沿いの標高約400mの地点から、上流側1kmほどの二次林内に、点在あるいは群生して生育していた(図11)。最初は荒れた林道で、進むにつれ道は細くなり、最後は踏跡が不明瞭になったが、標高450mのあたりまで確認できた。地質は非アルカリ珪長質火山岩類(デイサイト、流紋岩類)で、高木層にコナラ、クリ、イヌブナ、アズキナシ、フサザクラ、ケヤキなどが



図9. 地際で切断された痕跡が残るスギ人工林内のヒュウガミズキ(2016年5月12日)。



図8. 地面に接したところから発根したヒュウガミズキ(2016年5月12日)。



図10. 果実(2016年5月12日)。

見られ、低木層にはカマツカ、アブラチャン、クロモジ、アセビ、シラキ、キブシ、ノリウツギ、ムラサキシキブ、チャボガヤなどがあった。その中でもメグスリノキの生育は貴重とのことであった(小林氏私信)。谷一帯は、スギやヒノキを植えた人工林も多く見受けられた。植林内に生育するヒュウガミズキが見られなかったのは、岡山の場合と違い傾斜がゆるく、林床に日が差さず暗いためかと思われた。歩道脇の平坦な場所に生育しているヒュウガミズキは、多数の株を立て、中には樹高4~5m、直径6~7cmほどと、岡山県のものより大きなものも見受けられた。溪流辺に生育するものでは、溪流に倒れるように枝を伸ばしていた(図12)。

#### 調査地2. 丹波市青垣町

山域のほとんどがスギの人工林になっており、



図11. 溪流沿いの生育地(生野町:2016年6月14日).



図12. 溪流に倒れるように生える個体(生野町:2016年6月14日).

部分的に取り残されたように明るい二次林が開けた場所があり、そこにヒュウガミズキの小群落があった(図13)。標高約260m、地質は非アルカリの苦鉄質深成岩類(斑レイ岩類)で、沢沿いではなかったが、じめじめして湿度は高かった。二次林はかなり疎林で、ヒュウガミズキもヒョロヒョロした細い株が多く、生育面積、個体数ともに生野町に比べるとかなり少なかった。調査中ヤマビルの猛攻撃を受け、落ち着いて調査ができていないことを付記しておく。

#### 調査地3. 豊岡市金剛寺

兵庫県内で標本が最も多く採られている場所として、小林氏から地名のみお聞きしていた所にも寄ることができた。前の2か所での予備知識から、ヒュウガミズキが生育しそうな環境を探しながら沢沿いの林道をたどると、林道脇の二次林内



図13. 疎林内の生育地(青垣町:2016年6月14日).



図14. 林道に沿った生育地(金剛寺:2016年6月14日)

ヤスギの人工林の林縁部分に、点在あるいは群落となって生育している場所を見つけた(図14)。行き当たった場所が、これまで標本採集がされた現場かどうかはわからないが、上記2か所よりも日当たりがよく明るい林であり、ヒュウガミズキは標高60~100m、距離にして800mほどの範囲に生育していた。道は奥に続いてしたが、スギ人工林にすっかり覆われてしまったため、それより奥は調べていない。地質は堆積岩類で、3か所の生育地中最も標高の低い自生地であった。

注：地質情報は地質図Navi(産業技術総合研究所地質調査総合センター, 2015)から引用した。

## 考 察

この度岡山県で見つかったヒュウガミズキ群落を、評価するときに問題になるのが、ヒュウガミズキは、人為的に庭木などとして植えられることのある樹木だということである。人為的に持ち込まれた可能性について、考察を試みた。

まず鏡野町役場上斎原支所に、林道の開通時期と近年の改修工事の時期、林道工事に伴う樹木の植栽があったか、土地所有者が花木栽培などの目的で樹木を持ち込んだということはあるか、またそのような話を聞いたことはないか、などの問い合わせを行った。

『林道は平成16年か17年ころに開通したもので、最近の補修工事は20年ころが最後であると思う』との回答が得られた。前述したように、スギ人工林内のヒュウガミズキには、施業によって刈り取られたような痕跡が認められた。スギの樹齢はその太さから20年以上と判断されることから、このヒュウガミズキは、少なくとも20年前には既にその場所に生育していたと考えられ、それは林道開設前になる。また、ヒュウガミズキの生育地が林道によって分断されたように見えるのも、そのことで説明できると思われる。

また「林道工事の際に人為的な植栽が行われたか」については、『工事に関して樹木類の植栽は一切行われていない』とのことであった。「土地所有者が花木栽培などで持ち込んだということはあるか、またそのような話を聞いたことはないか」という問いに対しては、『林道沿線は町所有地であったり、個人所有地であったりするが、そ

のような話は聞いたことがない。もしそのように販売が目的ならば、あのような山奥の不便な場所には持ち込まないでしょう』という明快な答えが返ってきた。確かに売り物とするのであれば、樹形がいびつになるような厳しい条件の場所には植えないであろうし、あまりにも傾斜が厳しく、植えること自体が大変な作業と同時に、またそれを収穫するにも並々ならぬ労力が要りそうである。地元の人があんな場所には植えない、という意味はよく理解できる。

岡山県でヒュウガミズキが見つかった地点の地質は花崗岩である。他府県の地質について調べたところ、兵庫県の上記の3地点については火山岩類、深成岩類、堆積岩類である(産業技術総合研究所・地質調査総合センター, 2015)。また石川県編(2010)では酸性岩の緑色凝灰岩、福井県編(2016)では花崗岩地帯、京都府編(2015)では蛇紋岩、カンラン岩地帯や花崗岩地にも見られるという。このように、ヒュウガミズキの生育地の地質は多様であり、火成岩の場合も多いことが分かった。

岡山県におけるヒュウガミズキの生育地の標高は790mであり、調査を行った兵庫県内の3地点(標高60~450m)より高いが、小林氏の私信によると、兵庫県でも標高のより高いところにも生えていたように思う、とのことである。

人為かどうかを判断することはとても難しい問題であるが、以上の事象から推察すれば、林道開設以前からヒュウガミズキは自生しており、林道ができたために生育地にアクセスできるようになり、たまたま開花時期だったため目に留まった、とみなせるのではないかと思う。樹齢が一律でないことも自生であることを示唆しており、断崖の岩にはりつくように生えるものは、かなりの年数が経過しているように見え、人間の手によって植え上げられたとは、とても思えない自然環境である。

渓谷沿いの二次林内を好んで生育する様子から、随伴する植物にも、兵庫県の自生地と共通するものが多く見られた。

これらの調査結果から、岡山県で見出されたヒュウガミズキは、生育密度、個体数ともに大きな群落を形成しており、自生であると推定される。

## 謝 辞

兵庫県のヒュウガミズキについての情報を快く提供くださるとともに、本稿の校閲を頂いた兵庫県植物誌研究会代表の小林禱樹氏と、ヒュウガミズキの最新の分布情報を教えていただいた、倉敷市立自然史博物館の狩山俊悟氏に、篤くお礼を申し上げます。

## 引用文献

- 福岡誠行・黒崎史平・高橋 晃編, 2002. 兵庫県産維管束植物 4. 人と自然 (13) : 131-184.
- 環境省編, 2015. レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物- 8 植物 I (維管束植物), 646pp. 自然環境局野生生物課希少種保全推進室, 東京.
- 岡山県編, 2009. 岡山県野生生物目録2009, 378pp. 岡山県生活環境部自然環境課, 岡山.
- 山崎 敬, 1989. マンサク科. (佐竹義輔・原寛・亘理俊次・富成忠夫 編), 日本の野生植物 木本 I, pp.153-154. 平凡社, 東京.
- 門田裕一, 2016. マンサク科. (大橋広好・門田

裕一・邑田 仁・米倉浩司・木原 浩 編), 改訂新版 日本の野生植物 2, イネ科~イラクサ科, pp.183-184. 平凡社, 東京.

## オンライン引用文献

- 福井県編, 2016.改訂版 福井県の絶滅の恐れのある野生植物, [http://www.erc.pref.fukui.jp/gbank/RDBplant/pdf\\_p/rdbp006.pdf](http://www.erc.pref.fukui.jp/gbank/RDBplant/pdf_p/rdbp006.pdf) (2016年12月3日)
- 石川県編, 2010. 改訂・石川県の絶滅の恐れのある野生生物 いしかわレッドデータブック植物編, [http://www.pref.ishikawa.lg.jp/sizen/reddata/rdb\\_2010/index.html](http://www.pref.ishikawa.lg.jp/sizen/reddata/rdb_2010/index.html) (2016年12月3日)
- 京都府編, 2015. 京都府レッドデータブック, <http://www.pref.kyoto.jp/kankyo/rdb/bio/flower.html> (2016年12月3日)
- 国立開発研究法人産業技術総合研究所地質調査総合センター, 2015. 地質図表示システム地質図Navi. <http://gsj-seamless.jp/geonavi/> (2016年12月3日)